

祭礼山車における山台デザインの変容に関する研究 ：博多祇園山笠ならびに北部九州の比較を通して

松内, 紀之

<https://hdl.handle.net/2324/4475227>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (芸術工学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 松内紀之

論 文 名 : 祭礼山車における山台デザインの変容に関する研究
～博多祇園山笠ならびに北部九州の比較を通して～

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

博多祇園山笠行事は中世期博多湊に発祥を有し、過去 770 余年の歴史を継承し、櫛田神社の夏祭に奉納される祭礼である。1979 (昭和 54) 年、国指定重要無形民俗文化財である。その形態は発祥当初の姿が緩やかな変化を遂げながら、博多部の流を基盤に継承されてきた。7 月 1 日の辻祈禱にはじまり、山笠の飾り付け、オカミイレの儀礼、汐井とり、流舁き、朝山・他流舁きとあり、12 日には追山ならしと称して各山笠が櫛田入りを競う、13・14 日も流舁き・他流舁きと山笠舁きがなされ、15 日には追山笠と称して各山笠の櫛田入りが競われる。いわゆる山車祭礼と言え、由来、内容等において我が国民の基盤的な生活文化の特色を示すもので典型的なもの、と高く評価される。このように「山笠」とは祭礼中、山笠舁きの行為と山車そのものを示す場合とが重なる。

本研究は、旧来の山笠研究の多くが舁き棒より上部の飾り付けの意味や祭礼成立過程を論じてきた盲点と言える山車の基礎「山台」に初めて注目し、その成立と展開をデザイン史的観点から明らかにするだけでなく、視覚的に絢爛豪華な大重量の山車を、一転して駆動性に長けた山笠舁き用の駆動巡行装置として用いる祭礼のあり方そのものにも言及したものである。

すなわち「山笠」の原形とされる施餓鬼棚を含めれば、当初 2 本であった舁き棒が山笠舁きの必要から変容を遂げ江戸時代後期には 6 本にまで増えたことが明らかとされる。残された史料を管見するところでは、北部九州一円を見れば博多祇園山笠からの影響や伝播が跡付けられ、現代においても多様な形態の山笠祭礼行事が継承されている。

さらに本研究では、これら北部九州山笠祭礼に見られる山台を対象とし、それぞれの山台の形態の特徴把握と分類・整理を行い、各山台間の関連性と変容を比較検討しながら、博多祇園山笠からの影響と伝播に関する足跡を主として形態の成立要因から考察することをあわせて行い、そこから伝播関係を実証することができた。

【序章】先行研究 (塚本氏「博多祇園山笠における山車構造の成立過程に関する研究」) を検証した結果、江戸時代初期、博多祇園山笠の舁き棒本数とその取り付け方について新たな導き方を検討する必要があることを明らかにした。また福間氏「ハカタウツシと博多文化圏」は、北部九州の山笠は旧街道や遠賀川の川筋に沿って伝播したことを明らかにした研究であった。ただしこの論文は山笠形態の装飾部分を基軸にした研究であり、山笠構造部分を対象としたものではなかった。しかるに関連研究となるが、北部九州山笠の形態比較手法から大いなる示唆を得ることができた。加えて、山笠に係るこれまでの研究の大部分が装飾部分を対象としたものであることが明らかとなり、山笠構造部分を基軸に事例を収集・整理し、考察とその実証までを行うことの意義を確信し、これを本研究の目的とした。

【第1章】『博多祇園山笠巡行図』について、先行研究には「現存する『博多祇園山笠巡行図』屏風では最も古いものである」と記される。福岡市博物館が所蔵する『博多祇園山笠巡行図』以外に複数の複製画が存在する屏風絵である。福岡市博物館所蔵同屏風図は、現存する博多祇園山笠に関する絵図では最も古いものであると同時に、めったに描かれることがない構造部分や建設中の山笠が描かれる貴重な絵図である。黎明期の博多祇園山笠における山台構造部分を研究するにあたって欠かすことができない史料である。この絵画史料を参照し、江戸時代初期における博多祇園山笠構造部分の形態を整理した。

その結果、構造形態を読み取ることができた3基の山笠は、舁き棒4～6本式が併存し、取り付け方法は、舁き棒上下に位置する山台横架材によって挟まれて保持するものであった。ところが江戸時代後期の絵図を参照すると、いずれの山笠も舁き棒は6本式で描かれていた。江戸時代初期から後期にかけて、舁き棒本数は現代と同じ6本式に統一していったことを明らかにできた。

【第2章】北部九州に存続する山笠40事例を調査し、山台木構造に着目した系統分類を行なった。

北部九州山笠40事例の選択に際して、国県指定および各市町村指定の重要無形文化財を優先的に選抜した上で、これらと関わりの深い山笠および関連研究論文で取り上げられた事例を加えた。これらの全調査事例を6系統に分類し、比較考察を経て各山笠の特徴と関係性把握を行った。その結果、北部九州の山笠は博多祇園山笠から一方的に影響を受けて成立したのではなく、互いに影響を与え合ってきたことが分かった。

【第3章】博多祇園山笠山台を補強する括りである八ッ文字縄・火打ち縄そして、舁き棒の取り付けに係る棒締め縄について、その施工過程を豊富な図版を用いて明らかにした。また、‘八ッ文字’の機能・施工理由を探るため、博多祇園山笠同様に八ッ文字が施工される2山笠を加え、3山笠について比較検討を行った。

【第4章】北部九州に存続する山笠40事例を対象とし、舁き棒の取り付け方とその緊結材の用い方に着目してその特徴と関係性把握を行った。博多系山笠は多数本型（舁き棒4・6本式）山笠であるが、舁き棒2本式山笠および3本式山笠との形態的关系性を見出すことによって、変化過程をI型からIV型までに分類し、互いの関係性を把握した。その結果、舁き棒本数が増すごとに新たな構造的形態が考え出されてきたことが分かった。

【第5章】2016年に登録されたユネスコ記載世界無形文化遺産「山・鉦・屋台行事」33地域における山車を比較対照する中から、博多祇園山笠の特徴と形態変化の要因を浮き彫りにした。まず‘追い山’について、他地域の山車祭礼と比較した。追い山は、博多祇園山笠のみならずその周辺にも伝播した祭礼最高潮を彩る演出であるが、このタイムレースを開催している地域の山車は、ユネスコ記載無形文化遺産「山・鉦・屋台行事」指定の33地域中で、博多祇園山笠をおいて他にない。北部九州では盛んに行われるものの本州以東では珍しい行事である。山車巡行とともに行われる祭礼演出としては、全国的には‘お囃子’演奏や‘演舞’が盛んに行われている。加えて博多祇園山笠では、山台の組み立て・解体は毎年欠かすことなく行われるが、ユネスコ記載無形文化遺産指定33地域で毎年の山台組み立て解体を存続している地域はわずか4地域である。祭礼として博多祇園山笠の希少性を見ることができた。

【第6章】博多祇園山笠にみる都市祭礼への変化が、山笠形態変化といかに関わっていたかを把握するため、古来のマツリ的要素を存続させる他事例（春日若宮おん祭り）と祭礼斉行状況を比較した。すなわち祭礼は、限られた神官によって執り行われる秘儀としてのマツリとは異なり、広く一般市民と関わって執り行われる。比較考察の結果、現代祭礼への変化に伴い、江戸時代初期に比し、流と称される都市空間を活用した山笠巡行は多くの市民が舁き手、観客・応援者の両側面から介在するようになったが、その際、舁き手人数が増加したため山台形態が変化したことが窺える。旧来、

祭礼組織が担った山笠の組み立て・解体技術も、特定の技能者や組織工務店だけが受け継ぐものではなく多くの祭礼参加者が共有した。その際、組み立ての作業過程も参加者の適切な協働なしで組み上げることができない仕組みであったことが注目される。衆目環視の下、長年試行錯誤を繰り返すうちに、現代山笠に必要とされた形態と材料が選ばれてきた。すなわち、参加者の多くが山台構造を組み立て・解体作業を通じて体験的に理解した上で舁き手にもなる、この中で博多祇園山笠の緩やかな形態変化は生み出されてきた。博多祇園山笠の祭礼としての発展は市民社会の成熟と軌を一にするものであり、これが山笠形態変化にも関わってきたと言えよう。

【結論】本研究全体を振り返り、博多祇園山笠の山台形態の成立と変容の要因を、参加者の多くが山台構造を組み立て・解体作業を通じて体験的に理解した上で舁き手にもなる、といった山車として山笠づくり参加ならびに山笠祭礼駆動時の舁き手参加という2段階の身体感覚を伴った参加システムが生み出されてきたことに求めることができることを明らかにすると同時に、山台形態の変容は山笠祭礼駆動時の“速度と取り回しの良さ”を求めた結果とした。